

## 自己評価報告書

平成23年4月20日現在

機関番号：32621

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2008～2011

課題番号：20330103

研究課題名（和文）日本帝国崩壊後の人口移動と社会統合に関する国際社会学的研究

研究課題名（英文）Global Sociological Study on Migration and Social Integration after the Fall of the Japanese Empire

研究代表者

蘭信三（ARARAGI SHINZO）

上智大学・外国語学部・教授

研究者番号：30159503

研究分野：社会学

科研費の分科・細目：国際社会・エスニシティ

キーワード：人口移動、社会統合、日本帝国の崩壊、引揚げ、国境線の変更、送還、密航、戦後東アジア地域の再編

## 1. 研究計画の概要

(1) 第一に、日本帝国崩壊後の交錯する人口移動とそれに伴う社会統合を国際社会学的に明らかにする。

(2) 第二に、終戦直後の人口移動だけでなく、グローバル化が進行する現代までをも射程に入れて考察する。

(3) 第三に、日本を中心としながらも、フランス・ドイツ・イギリスを比較対象とすることによって、帝国崩壊後の人口移動とそれに伴う社会統合メカニズムの個別性と普遍性を明らかにする。

## 2. 研究の進捗状況

(1) 第一に関しては日本帝国圏の植民地などに関して、帝国形成期、膨張期、そして崩壊後の人口移動について研究を進めてきた。朝鮮、満洲、樺太、台湾、南洋に関してそれぞれ数名が担当して、とりわけ帝国崩壊後の人口移動について取り組んできた。

(2) 第二に関しては、人口移動は帝国崩壊によってだけでなく、戦後の東アジアにおける地域秩序の再編によって規定されたこと、また冷戦によって人口移動は基本的には抑制されたこと、そしてグローバル化によって再活性化されていることを明らかにしてきた。たとえば、中国に残留していた日本人の祖国への帰国、フィリピン残留日本人やインドネシア残留日本人の帰国などを明らかとしてきた。

(3) 第三に関しては、今年に取り組む課題となっている。

## 3. 現在までの達成度

②おおむね順調に進展している。

(1) 第一に関しては相当程度明らかに出来ていると思う。その成果は、蘭編著（2008）『日本帝国をめぐる人口移動の国際社会学』、同編著（2009）『中国残留日本人という経験』、そして科学研究費中間報告書としてまとめ、刊行した。さらには、本科学研究費研究班の研究成果の中間報告として「アジア遊学」2011年6月号で特集号を組む予定である。

(2) 第二に関しては、蘭が日本移民学会の編著書に木村との共著で大筋を示した。それは、木村健二・蘭信三「日本帝国圏内の人口移動と戦後の環流、定着」のⅡの「戦後日本をめぐるポストコロニアルな人の移動と多文化共生」

(3) 第三に関しては、今年に取り組む課題となっている。

## 4. 今後の研究の推進方策

今年度は「アジア遊学」に本研究班の特集を組み、最終年度として研究会を4回程度開催して、研究分担者・連携研究者・研究協力者全員が研究成果を報告し合い、本研究班の共同研究の最後のまとめとしたい。

## 5. 代表的な研究成果

〔雑誌論文〕（計4件）

- ① 飯島真里子「戦前期日本人コーヒー栽培者のグローバル・ヒストリー」『移民研究』査読有、第7号、2011年3月、1-24頁。
- ② 高畑幸「在日フィリピン人社会の現状分析——第一世代の加齢・高齢化と新日系人の流入を中心に」『部落解放研究』、査読有、17号、広島部落解放研究所、2011年1月、67-83頁。
- ③ 福本拓「東京および大阪における在日外

国人の空間的セグリゲーションの変化」  
『地理学評論』査読有 83 巻、2010 年、  
288-313 頁。

- ④ 野入直美 『『アメラジアン』という視点』  
社会理論・動態研究所『理論と動態』、査  
読有、第 2 号、2009 年 10 月、18-39 頁。

〔学会発表〕(計 2 6 件)

- ① 高畑幸 「永住フィリピン人女性の生活世界」(東南アジア学会、統一シンポジウム「日本の中の東南アジア～滞日ニューカマーを中心に」2010 年 12 月 5 日、東洋大学。
- ② 外村大 「日本社会と在日朝鮮人一戦時体制、解放と戦後の再編」国立ソウル大学日本研究所主催シンポジウム「国民国家日本の境界とディアスポラ」、2010 年 11 月 25 日、ソウル市国立ソウル大学校日本研究所。
- ③ 外村大 「日本帝国と朝鮮人の移動」、韓国日本史学会主催シンポジウム「韓国併合と日本帝国主義 帝国秩序に及ぼした植民地の衝撃」2010 年 11 月 20 日、ソウル市祥明大学。
- ④ SAKABE Shoko, Multi-layered Memories of “Manchuria” in a Border Town, The 7th East Asian Sociologist Network Conference、成城大学、2009 年 10 月。
- ⑤ 外村大 「在日朝鮮人の戦後史—不参加と排除のなかの奇妙な安定—」、日独共同大学院プログラム・国際シンポジウム「市民と市民社会を問う—過去・現在・未来—日独比較研究の視点から」独立行政法人日本学術振興会日独共同大学院プログラム・東京大学大学院総合文化研究科・教養学部ドイツ・ヨーロッパ研究センター (DESK)、2008 年 3 月 19 日、東京大学駒場キャンパス。

〔図書〕(計 1 5 件)

- ① 野入直美 「ディアスポラと“ローカル” - ハワイにおける帰米とアメラジアンの事例から -」白水繁彦編『多文化社会ハワイのリアリティー 民族間交渉と文化創成』2011 年 3 月 20 日、145 - 180 頁。
- ② 高畑幸 「意味ある投資を求めて—日本から帰国したフィリピン人による出身地域での起業」、竹沢尚一郎編著『移民のヨーロッパ—国際比較の視点から』明石書店、2011 年 3 月、218-243 ページ。
- ③ 外村大 「朝鮮人労務動員をめぐる認識・対応・矛盾 1937~1945 年」黒川みどり (編) 『近代日本の「他者」と向き合う』解放出版社、2010 年 11 月、200-226 頁。
- ④ 蘭信三 (編) 『日本帝国崩壊後の人口移動と社会統合に関する国際社会学的研究』科学研究費補助金中間報告書、2010 年、

全 321 頁。

- ⑤ 蘭信三 (編) 『中国残留日本人という経験』勉誠出版、2009 年、全 720 頁。

〔その他〕(計 4 件)

【本科研費研究班主催シンポジウム】

- ① 「2010 年、いま戦後引揚げを問う—帝国崩壊と東アジア社会」2010 年 9 月 18 日、九州大学、福岡市。
- ② シンポジウム「近代満洲の成立」2010 年 7 月 30 日、大阪大学中之島センター、大阪市。
- ③ シンポジウム「帝国崩壊と人口移動」2009 年 8 月 23 日、北海道立開拓記念館、札幌市。
- ④ 「満洲移民国際シンポジウム」2009 年 1 月 31 日、京大会館、京都市。